

グラブルの世界へ転生
したんだけどこれから
どうしようか

アルザス39

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とりあえず雑に書きたいように書いた

エタる可能性大なので気長に待つ人は待っててね

評価も感想もしてくれると嬉しいから

「○○が良かった」「○○より○○の理由として良くない？」

とかでもいいのでよろしくお願いします

目次

グラブルの世界へ転生したんだけどこれ からどうしようか	1
第2話	4
3話	7
4話	10
5話	13
6話	16
7話	19
8話	22
9話	25
10話	28

グラブルの世界へ転生したんだけどこれからどうしようか

いきなりで悪いんだけどさ、俺って転生者って奴らしいんだよね。

わかるよ？初っ端からなーにトチ狂った事言ってるだっつて？まあ聞いてくれよ。聞け。

前世ではまあ頭が悪い、物覚えも悪いなりに微妙な学生生活送った後に新人教育もしないロクでもない会社に入社しちやっただけどさ、どうでもよくなって二カ月ぐらいでニートへ転職したんよ。

寝て起きて腹減ったら飯くって、スマホやパソコンでゲームや動画見て、風呂入った後にまたゲームやら動画やらして寝る。って言う生活サイクル回しながら家から追っ出されないように洗濯や掃除、親の車で送迎なんかしたりしてよ毎日生活してたんだわ。

その時にグランブルーファンタジーってゲームにハマってよ、微課金ながら続けてやってたんだわ。

男キャラはかっつけえし、女キャラは可愛いし、武器も抱き枕カバーになるぐらい人気

で驚いたよね。

スラ爆やヘイローしながらランクも180超えてもうちよい頑張つてやるかあとか
思いながら十天解放素材集めの日々を過ごしてたんだよ。

A PとB Pをとりあえず空にして昼メシにしようとおもつてたらうちでは珍しいん
だけど、言つちまえば死んじまうその日の昼に食べるレンチン冷食も茹でるパスタもな
くてかと言つて白米だけだとなんか味気ないしパンは切らしてたし…

腹もへつてたしいつも使っている車も親が使つててなかったから、昼メシとついでに
安酒とツマミを買いにチャリでコンビニへ行ったんだよね。

まさかその帰りに信号無視したトラックに轢かれるだなんて思わなかったんだけど。

あのトラックの運転手、電話しながら脇見運転してやがってさあ…わかる？わからない
いよなあ…

骨がバツキリ折れる嫌な音を聞きながら右腕の方からミンチにされてく感覚。

即死でなかった分「あ、俺死んだな」つて感じるあの時間ね？正直やばかったよね…
二度と経験したくない。

血がガンガン無くなつてくのはわかるし、体の動く感覚はまるでないし、轢かれた時
は赤い視界だったはずなのに徐々にブラックアウトしていくしさ…

んで目が醒める感覚ってあるじゃん？寝起きの感覚みたいな感じのあれからグラブ

ルの世界へ2回目の誕生ですよ。

いやね？わかる、わかるよ？お前は一体何を言っているんだ？ってなるのもわかる。でも当事者はずっと???ってなる。ていいうかなった。むしろ現在進行形でなってる。な
んでかって？

だって俺の体は今、グラブルの婆さんグラの人に抱き抱えられてるんだもの。

第2話

なんやかんやあつて俺はその婆さんに世話になることになつたらしい。なんせ俺が拾われた所は古戦場と呼ばれる場所で言つてしまえば騎空団対騎空団、いわゆるギルド戦が行われている場合だつた。

ゲームプレイヤーだつた俺はその話を聞いた時よく生き残ることができたなど本気で思っていた。何故かつて？そりゃあ……

貢献度を稼ぐ為に約30秒程度で魔物を蹂躪してゆく課金額と有給休暇がぶつ飛んでる天上団の方々に、そこまではないにしろそれに追隨して貢献度を稼いでいく順位ランカーの方々、そして実はヤベー奴らが多いエンジヨイ勢……

そんな奴らが一堂に会し対戦相手より貢献度を稼ぐ為に朝から晩まで戦い続けるのだ、運悪く巻き込まれでもしてみろミンチどころか肉片すら残らんぞ。正直腕や脚の一本や二本無いかもしれなかつたんだよ。

まあそんな人外みたいな奴らが跳梁跋扈しているような場所で俺はなんとか無事に拾われた訳なんだわ。マジ感謝ですわ……

そんなアンラッキーな場所にて第二の誕生を迎えた俺は五体無事な状態で拾われた

ラッキーボーイとしてその婆さんに連れられて今、主人公ことグランもしくはジータがルリア達と邂逅する始まりの島ザンクティンゼルにやってきたのだ。

「ふえふえふえ……今日からここがあんたが住む家だよ」

婆さんは楽しげに笑いながら話を始めた。

「この間までいた良い果実の種が旅立ってねえ、そいつらがいなくなっちゃまって寂しい空気があつただんだけど新たな種が来てみんな嬉しいのさ」

ん？良い果実？旅立つ？もしかして主人公旅立った後なのか？

「お前さんも色々な才能がありそうだから、育て甲斐がありそうであたしや嬉しいねえ」
才能？……もしかしてさこの婆さんあの婆さんか!?

「さて英雄直伝の妙技をしつかり叩き込んでやる為にまずは身体作りからだねえ……」

やっぱクラスⅣ取得の婆さんじゃねえか！謎の強さを持ち主人公にクラスⅣのジョブを伝授するヤベー婆さんに俺は拾われたのか。

「魔力の素養もある……ああ楽しみだねえ」

拝啓、転生する前のミンチにされる俺。転生した後はもつと過酷な場所にて鍛練をする必要があるのであります。

あつても武術と魔法の才能があるっていうのはこの世界ではすごく嬉しいことなのではないか？少なくとも今の俺はスツゲエわくわくというかうきうきというかさな

感情と俺は一体どんなヤベエ鍛練をさせられるのかという不安でいっぱいだった。

「とりあえずお前さんに名前をつけなきゃねえ……」

婆さんはそう言って軽く悩み始める。数分して婆さんはこう言った

「お前さんの名前はストラ、今日からお前さんはストラだよ」

こうしてグラブルの世界にて俺は新たな名前をもらった。

3話

それからしばらく時間が経った。年齢的には13歳になり身長175cm、体重85キロほどにまでなった。あ、自分はヒューマンだよきつと。種族不明とかグランやジータみたいなの？族ではきつと無いはずだよ。

個人的にはドラフのガツチリした筋骨隆々な体型やエルーンの独特な耳の似合う優男みたいなしなやかな体型にも……いわゆる種族体型にも憧れはあるけどやっぱ馴染んだ？種族体型でよかつたとも思う。

それだけの時間が流れ成長した俺は今……

一生懸命丹精込めて作った釘バットを手に、婆さんに連れられて来た場所にいた銀色に輝く巨大なスライムに目掛け死んだカツウオヌスのような目をしながら剣聖1アビを打ち続けていた。

あの婆さんEX2ジョブも使えたのね、正直EX2ジョブ取得の時もこの婆さんのグラだからやっぱりなってるよね。そしたらさ、婆さん突然釘バット持ち出して

「それじゃ行くからついてきな」

って言われてついていった先は謎の塔型の……いやもう言っちゃもうわパンデモニウム

だわここ。色んなヤベー奴らが詰め込められているあそこな？そこで始まる唐突な共通スライムレベリングよ。

んでそれが5時間くらい続くんすよ、精神壊れるう！とか思ってたらさあの婆さん思いついた感じに

「このぐらいでいいかねえ…それじゃ黒い水晶割りに行くよ」

とか言いだすんですよ。きつとそこからだね、死んだカツウオヌスのような目ができるようになったのは。青色と黄色のビー玉集めてチクチク殴るって言うのが毎日続くんですよ。そしたらいつのまにか使えるようになってる剣聖のジョブとその他EXIとクラスIIIまでのジョブ達。称号？考えるのをやめるようになってから連れていかれたんだろうなああって思う。なぜか知らんけど最終階層までの素材がゴロゴロあるねんな、後で整理しておかないと……

そんな俺は7歳くらいまでは身体作りと武器、魔法の使い方をみっちり…それはもう濃密な訓練の時間があった訳よ。この世界こんなやらんと生き抜けないの？マジ？つてなるよね。でも考えて欲しい、星晶獣とやたら戦う事のある？いや普段戦わないにしてろこの世界で敵から逃げるにも生き残るにも悲しい事に力があるんよね。そりやあ必死にもなるじゃん？もう死にたくないし。でも魔法とか武器とかワクワクしちやつてさかーなり辛いけど楽しくはあった。

そんな毎日を送るようになったんだけどさ、元はニートの屑よ。少しでも楽しんで暮らしたいとか思うわけよ。そんな俺は少しでも楽するために回復魔力を体に意識して回すようになった。魔力って万能でさだいたい普段の生活ならなんとかなったりした。というか疲れを残したまま次の日とか倒れてしまうから回復魔法様いつも助かってます。もつと楽をするために色々頑張らねば……。

そして銀スライム爆破をしているの今になるんだけど、気がついたら婆さんいなくなってるのんな。1人でもできるし家に帰るからしつかりやるんだよって事だと思うんだけどさ……一言あつてもいいんじゃないかなあ。

まあやるんだだけさ。

4話

あの婆さんが銀天を持ってきた。いやホントもうEX2ジョブを取らせる気マンマンやんけえ！テンション高めでウキウキの状態から繰り出された

「ストラア！30秒で支度しなあー！」

きつとちよつと後には婆さんの忘れたい記憶になるに違いない。そんな婆さんに連れられて今回はみんな大好きシエロカルテの店にやってきたのだ。

「あなたがストラアさんですねー？あの人からいつも愉快な人だつて話を聞いていますよー？うぷぷぷぷー」

いったいなーに話してるんですかね（震え声）

「今回はこの武器達の鍛え直しという事ですがーよろしかったですかー？」

不本意ですがその通りです。英雄武器一式よろしく願います。

「はいー！任せましたー！この量ですのでー少し時間がかかりますが大丈夫ですかー？」

問題ないつすね、それじゃお願いします。

「今後ともご鼻屑にお願いしますー！」

そうして17個の武器と大量の素材達を引き渡し俺は日課になったスラ爆を行うため店を後にした。

店で渡した17個の英雄武器、つまり2019年1月7日までに実装されている武器達が作られるのだ。実用性は別としてあつて困るものでもないからパンデモニウム周回を頑張ったご褒美としては最高級なのでは…？とか考えたけど問答無用で連れていかれてたし割と妥当やな！

この時の俺は割と短絡的思考になつていたと思う、あの婆さんがみっちり教え込むという事をすっかり忘れていたから新しいジョブに浮かれてスツゲエ楽しみにしていた。そう、忘れていたのだEX2ジョブが取れるという事はクラスIVジョブも取れるという事を……

つまり英雄武器達が出来る一週間後……

みんなストラ君だよ、楽に生きていくためには気をつけないといけない事がある。保護者又は親には気をつけようね、しようがなくなるからね？Noと言える生き物になろうね…約束だぞ！

ストラはクラスIVジョブとEX2ジョブの取得にて地獄のような鍛練が開始されていた。やれ葉はくやれ魔法はくだの言われてるが半分くらい頭に入ってなどいない、鍛練についていくだけで精一杯なのだ。

ベルセルクからクラスIVが始まり同時並行してドクターなどEX2ジョブの取得をさせようとするあの婆さん、なんやかんや言いながらも食らいついてくるストラ君にウキウキしながら笑いが止まらない。正直な話、ついてこれるとは思ってなかったのだ。できなかつたら

「まったくだらしがないねえ…：しようがないからクラスIVから叩き込んでやるから覚悟しな」

とか言つて一つずつ教えていくつもりだったのだ。なのにストラはついていけてしまったのだ、つまりは「無理いいい！」と叫べなかつたストラが悪いのだ。自業自得である。

そんな事何にも知らないストラ君

地獄のような鍛練からだいたい12日後

「ひよっただけどついにたどり着いたねえ…：お疲れさん、今のところ免許皆伝だよ」
ストラ、クラスIV&EX2までのジョブ取得完了。

5話

地獄のような鍛練に耐え一通りのジョブを取得したストラは悩んでいた。今まで必死だった彼はゆっくりというかぐったりというかそんな感じの時間をようやく作るこゝとが出来たためか、気になる事もとい知らなければならぬ、いや知っておきたいことがあった。

転生してから結構な時間が流れている今グラン達はどこ何をしているのか、正確にはメインストーリー的には何話あたりなのか分からないのだ。

知っていればその時にヤバめでテンアゲな場所には気をつけないといけないからね。正直言ってもうてきとーに生きていく事を考えているために面倒ごとに巻き込まれたくないのである。

ただ問題がある、あの婆さんがなんかの支度をしている。

あの婆さんがなんかの支度をしている

やめてくれよお（震え声）

あとはもうシエロさんのとこでちよつとしたお仕事もらって毎日ダラダラ生きていくんだからあ！

「ストラアア！ちよつとこつち来なあー！」

ほーらお呼び出しですよ、行きたくねえなあ……

まあ行かないと地獄の鍛練パート2が始まってしまふからね、しようがないけど行くしかないんだなこれが。

「とりあえずこの荷物持つてついてきな」

と言われて渡された大きめなバックパック、なにこれすんげえ重いんですがいったいなーが入ってるんですかね。

言われるがままに荷物を持って婆さんについていくとそこは騎空艇の発着場でさらにはシエロさんがいたのだ。

「お久しぶりですねストラアさんー、今回ちよつと用があつてーその護衛を頼みたいんですよー」

お仕事ですか、それは構わないですけど何故俺を選んだのかコレガワカラナイ。

「ストラ、そろそろ世界を見てきな。きつとお前を誰かが待っているからね力は授けた、あとは見つけるだけさ」

はいい？婆さんそれはつまりどういう？

「独り立ちのとき、これからは傭兵として頑張りな荷物とあの小型の騎空艇は選別さね。頑張りな」

マジか、つまりゲームでいうソロ団設立ですか。

「という事でしてー護衛の依頼、頼まれてくれませんかー？」

えーつとわかりました。依頼、受けます。

「ありがとうございますーそれでは2時間後には出発しますのでー2時間後ここでー準備のほどよろしくお願いしますねー」

そう言っつてシエロさんは去っつていった。

「とりあえず騎空艇に案内するからついできな」

婆さんもそう言っつて歩き出した。俺も妙な気分になりながらついでいく。

婆さんから騎空艇の事を色々話された。これから一人暮らしと考えると、自然と真剣に聞いていたらしい。緊張しているのだろうか、それともワクワクしているのだろうか。

「一通り説明は終わつたよ、それじゃ頑張りな。」

婆さんはそういうと足早に去っつていこうとするけどその背中に向けて

「…ありがとうございます！いつてきます母さん。世界、見てきます！」

そう言っつてあたまを下げた。

その後、シエロさんと合流して俺の始めての空の旅が始まる。

さあ、冒険を始めよう。

6話

冒険を始めて最初に知ったのはシエロさんの人望というか信用というかマジ半端ねえつすわつてこと。いやすんげえのよ、シエロさんのとこ人が途切れないのよ。やっぱスゲー人なんやなつて。

そういえば俺の初船出から3日ぐらいで目的の島についたんだけど、いやー空飛んでる魔物達割と多いね！苦労せずに倒せたけどソロ団はキツイツシユ。傭兵業が盛んなのもわかる初船出でした。

そうそう、それでね？ようやく会えたんですよ。グランブルーファンタジーエンドコンテンツの衆の人達に。まあ十天衆なんですけど……

ヤベーのよ、強者の風格半端ないつて。フェイトエピソードとかでモブが絡みにいつたりしてたけど何を考えたら絡みにいけるのかコレガワカラナイ。

まあそんな人達に会えた俺は今

「ありがとうストラ君、おにーさん助かつちやつたよ。あいつらほーんと話聞いてくれてなくてさあ。影でどんだけ俺が火消ししてるか知らないんだよねえ……」

いやーやつぱ頼りになる人だからみんな甘えてるんですよー。あなたならなんとか

してくるって感じで。

「ははは！まあそれならちゃんとか俺の話聞いて欲しいんだけどなあーって」

新しい仕事として十天衆頭目、シエテさんをタクシーしています。

……どうしてこうなった。

いや、まあいいんだけどね？お仕事だし、お金入ってくるし。いいんだけどねえ！

シエロさんにシエテさんが「ん？あの子どうしたの？」的な話を振った事から目をつけられたと言うかなんというか……シエロさんもノリよく「頼りにできる子なんですよー」なんて言うから「おにーさんと力試ししようか」って言われてシエテさんと何故か天星器を覚醒も所持もしてないのにタイマン張ることになり、手加減されているとはいえ勝ってしまった為かなお目をつけられてしまった。

そしてシエロさん所からの紹介って感じでシエテさんを送る事になりつたら小声で「これからしばらくこう言うお仕事お願いしますねー」と笑顔のシエロさん。もしかしてなくても俺、十天衆専門でタクシー業務を行う人になるんですか（震え声）
そんな事になってしまったので小型騎空艇君頑張ってくれ……。

座標指定して自動運行できる艇でほんと良かった。ありがたう婆さん、まさかタクシー業務を行う事になるとは思わなかったけど乗せてる人が人だから間違いなくなんらかの出来事に巻き込まれるよ！チクショー！俺のグータラ傭兵人生は？怠惰な生活

は？どこにいつてしまったのか……

(そんなもの、最初からきつと最後まで) ないです。
もう一度言わせてくれ、どうしてこうなった！

7話

十天衆のタクシー業務を行う事になってしばらくしたけどあの人は戦闘民族か何かなのかな？どいつもこいつもタイマン戦闘仕掛けてきやがって！なんとかギリギリで勝ったからいいけど話を聞いたらシエテさんが「戦ってみるとわかるよ」って言うって回ってるらしいの。絶対に目の前で七星剣叩き折ってやるからなああの野郎お……

あつてもソーンさんとエッセルさんと仲良くなれたのは嬉しい。俺が年下だからかほんとお姉さんしてました。また甘いものとか買ひ物とか行こうね。

そんなちよつとしたデートみたいな事、いい思い出もしたストラ君。忘れられているかもしれないが根は屑の怠け者である。十天衆様達にタクシー業務でこき扱われているが、大体は婆さんがくれた騎空艇のおかげで操縦を多少やるだけで毎日三食昼寝付き生活をしており、そこまでまじめに働いていなかったりする。

そんなストラ君にも、最近困ったことが起きている。

最近、婆さんの気配を感じるのだ。

ストラ君、大体のやな予感って奴はしっかり当たるのが世の常……

具体的に2019年の3月22日ぐらいからやな予感を感じているのだ。

もつと詳しく言えば何事もなければその日のアップデートでジョブが増えるのだ、それもクラス3とクラス4同時に。

婆さん……ジョブ……やべえ修行……うっ頭があ!!?

みたいな感じになってるので、致し方なく頑張る事にしたのだが……

「ストラ君、じゃあやろうかあ!」

「それじゃ君の強さまた見せてもらおうとしよう」

シエテとウーノにちよつと頑張っている姿を見られてしまった為は何やら多大なる勘違いをされ、2人相手に手合わせをする事になってしまったのだ。単体でもひーこら言いながら戦ってたのに2人になったら勝てるわけないだるお!?

あ、やめて!シエテさん自分単騎なのに10回のアビダメはダメだって!剣光も付けて殴りに来ないで!ウーノさんもかばうカウンターとかされたらシエテさん殴れないし反撃痛すぎイ!しかも的確に100%カットを綺麗に決めないで!

こつちからの攻撃はまるで通らないのに相手からの攻撃は一方的に通るやべえ糞ゲーをやらされてる気分になりつつもなんとかHPを0にする事なくしのいでいる。むしろなぜかしのげてしまっているから余計に辛い思いをしているのだがストラ君以外にもその事実が気がついていない。下手に強いと余計な地獄を見ることがある……

よくよく考えてみたらやつてる事婆さんとの修行と割とかわからねえじゃん!!?ヤメ

ロー！シニタクナーイ！！？

ヒギイ

8話

▽ババア突然の襲来へ

いや、待ってくれよ……急に二刀流とかできないって、剣とか一本でもてんでこ舞いなのに二本とか正気の沙汰じゃないですって。

え？オクトーさんは三本だつて？いやあれは十天衆様だし別枠だつていつも言うてるでしょ。シエテさんもいっぱい出してるって？あれは射出してるし使ってるの実際一本だつてノーカンだよノーカン。ね？普通は一本でいいんだつて、一本でいいつて言ってるだろおおお！

無事？にストラ君を確保したババア、満面の笑み。

突然剣を二本持たされてスパルタスライム道場開園である。

本汁（エリクリシール）を頭からかぶりながらひたすらスライムと殴り合い。シエロさんの方にはすでにババアから連絡がいつているらしく、その情報は十天衆頭目シエロにも届いてしまう、当たり前だよなあ？専属タクシーマン？

「やあストラ君、楽しい事してるじゃない。おにーさんにも教えて欲しかったなあ？」
「急とはいえ、二刀使うとは僕も少しばかりお手伝いしましょう、大丈夫ですよ安心して

切り刻まれてください。」

「お主が力をつけることは良き事、久方ぶりに手合わせ願おう。」

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

やめて！許して！ババアだけでも大変なのに！十天衆様達がしごきに来たら死んじやう！本当に死んじやうから！シエテさんはにやけ面だし、カトルさんは前に負けた事根に持つてるし、オクトーさんに限っては普通に死合いなんだけど！

ソーンさん、エッセルさんこの際フンフちゃんでもいいから！

ダレカタスケテエエエエ！

へクラスⅢグラディエーターおよびクラスⅣクリュサオルが使用できるようになりました

ストラ君の尊い命が消えかけたが何の問題もない。死んでなければ安いのだ、しぶとい奴め。その分少しだけ強くなれたのでまたしぶとくなくなった筈だ。

そう言えばストラ君の夢（気絶中）に天司達が最近よく現れている。

眷属を頼むだの優しい子だからお願いね？だの好き勝手に言っては消えてゆくのだ。挙げ句の果てには試練を受けてもらうだのやめてほしい。…え、もしかしてまた厄介ごとが増えるのん？ただでさえ一人になる時が寂しく感じるようになってホワイトラビツトを飼いだめたばかりなのに兎さんストレスで死んじやうやん。勘弁してね？

天司に目をつけられたストラ君、君の船が星晶獣でいっぱいになる日は割と近い。悲しい事にストラ君はホワイトトラビットが「可愛いウサギ」程度にしか見てない、あれは石での効果だし…とたかをくくっているのだ。言ってしまったえばネクロノミコンの原本を持っているのと割と変わらないのである。……つまりそういう事であるがまるで気がついていない。

ストラ君の平穏な日々はまだしばらく先になりそうだ。

9話

ホワイトラビットとのほんとした日をゆったりと過ごしているストラ君は割とスローなライフを満喫していた。勝てる気がしない婆さんはいない、無茶無謀な修練は無い、めんどくせー相手もいないの3無いづくしを堪能しているのである。

もふもふしながらゆつくり時間が流れている感じがするなあ……

ずつとこんな風に過ごしたいなあ……

そんなことを考えていると

(真実を追い求め彷徨いし者、異端なる人の子よ……安寧の黄昏を捨て、さあ！今こそ覚醒を……！)

脳内に直接語りかけてくるような声が聞こえる。なんでようやく得た安寧を捨てなきゃならんのかコレガワカラナイ。つまりはスルーが一番やなつて。ああ、ホワイトラビットは可愛いなあ……

(あ、あれ？聞こえてない？いやいや、そんなことないよね!?あのあの！俺、俺！俺だつてー！)

誰だよと思ったのも束の間のおんびりとした空気を切り裂き風が唸り、騎空艇は嵐に巻

き込まれたかのように激しく揺れ動いた。

流石のストラ君でも只事ではないと直感し何が起きたか確かめるため、甲板に向かって駆け出した。ホワイトラビットを抱えているのは気にしてはいけない。

騎空艇の甲板にやってきたストラ君が目にしたのは踊り狂う暴風の渦中に立ち、いい感じに陽の光を浴びながら微笑む藤色の髪の青年だった。

「フツ、とある方から聞いていると思うが我は軍神！踊り狂う暴風！グリーイイイムニル！」

……………お、おう。

「あ、あれ？ちよつと待って？なんか引いてない？カツコよかったよね…？よね？なあ！なんか言ってくれよー！」

勝手に涙目になりながら懇願されたストラ君はとりあえずホワイトラビットをグリームニルにもふつとさせる。

「んはあ…なんだこいつ！もふもふしてて可愛いじゃないか！」

なんか悪い奴ではなさそうやん。んでつい最近追加されたこのブラックラビットを持つてくるじやろ？それを両肩に乗せてやるとな？

「もふもふが倍になつて庇護欲二倍ニルだぞ！なんか何にでも勝てる気がするぞー！あ、今日からここでお世話になるからな！よろしくな！」

え、あの夢ってマジの話だったんか。いやまあ部屋はあるから問題ないんだけどつまり後三人も来るのか……こんな濃い奴が後3人もくるのかあ！え、シエテさん達になって説明しよう。ウチのラビット達が連れてきた……？いやこれだと間違いなく誘拐犯やん。突然やって来て来てラビット達にやられた奴……これだけ聴くと強盗犯、うさぎ達に負けるみたいになってるし……。

その時、ストラ君の灰色の脳細胞が閃めく。

婆さんの知り合いつてことにすれば良いじゃん！もしかして俺って天才的発想の持ち主なのでは？

とりあえず婆さんのせいってことにすれば大体何とかなるって気が付いた事が良いか悪いかは次に婆さんに会うときにわかることだろう。

こうして、ストラ君のほのぼのな日々は消えてゆく。喧しい仲間とこれから加入してくるであろうヤベー奴らによって基本的に屑側のストラ君は良くも悪くも動かなくてはいけない人間になってしまった。

尚、シリアスさんの見所さんはいないのであしからず。

10話

いやー平和だなあ…最近是人…人？が増えたから作業分担したんだけど、なんやかんや言って楽しく作業してくれるグリム君のおかげでラビット達と触れ合える時間が増えた。ゆつたりと時間が過ぎて行く…ありがてえ話ですよ、wもふもふ堪能できるのは…

「ストラア！迎えにきたから30秒で支度しな！」

※新ジョブ実装されるたび婆さんはストラ君を拉致しにきます。

平和、だったなあ…短い平和でしたねえ…。

あ、グリム君。ちよつとラビット達よろしくね？きつとすぐに戻ってくるからそれまで自由にしててね。それj

言い切る前に婆さんはストラ君をお米様抱っこしてどこかへ消えて行った。尚、今回実装されたジョブはソルジャー。つまり突然のサバイバル訓練が始まるのである！！

いきなりだがよくわからないジャングルのような場所に連れてこられたストラ君、婆さんから

「多分一週間後ぐらいに迎えに来るからしばらくここで生活しな、今回は生き残る訓練

も兼ねてるからね、まあ死ぬんじゃないよ？」

死ぬようなことがあるのか…とか思っているとな이프とネブカドネザルを渡された。支給品はこれだけらしい…ええ？マジ？水場も食えるもんもわからないジャングルのような場所で一週間？ヤバヤバのヤバじゃん。

いや待てやと言ったところすでに婆さんの姿は見えない、どこかへいかれてしまったようだ。

しよがなくなが始まってしまったサバイバル1日目

馬鹿野郎！ちよつと探索しただけでやべえ魔物ばつかじゃん！

無駄にでかいスライム、群をなしているキラビー、そこら辺を闊歩しているヒドラ達、空にはグリフォンにワイバーン、おまけに見つけた水場にはマイトフィッシュの群れ。

…俺は生き残ることができのだろうか

サバイバル2日目

…せめて水場は確保しなくてはとか思ってたらグリフォン君が水飲みにきた。グリフォン君、マイトフィッシュをバリバリ食ってますやん…あれは食えるやつなのか…？まあいい、暫定食料と水の情報があるだけましやな。

サバイバル5日目

日は飛んで5日目だがマイトフィッシュくんは食べた、うん味は考えない事とする。水も飲めるようだったので特に何があったわけではない。あえて言うならグリフォンとワイバーンに目をつけられちやつた事ぐらいかな（震え声）

エサ場を荒らした奴みたいに執念深く追ってきやがる。

サバイバル7日目

グリフォンやワイバーンの肉ってまだ食える部類に入るんやなあ…

わかつた事は今の装備ならスライム以外はなんとかなる魔物ばかりって事。なんや、楽勝やな！ガハハ！

サバイバル9日目

馬鹿野郎！お前、ヒドラが群れたら勝てるわけないダルオ！

さらつと婆さんは迎えにこねえし！スライムにも見つかるし散々や。

もふもふが恋しい。

サバイバル12日目

いやああああ！ヒドラがスライムコーティングされたあああ！

ダメージが入らないのおおお！

やべえよ…やべえよ…

サバイバル14日目

逃げ切った：生き残ってやったぞオラア！

婆さん迎えに来るの遅いんだよ！二度とこれはやらんと誓うとストラの意識は次第に落ちていった。

ジョブ、ソルジャー解禁。

戻ってきたストラ君、グリム君に心配されながらしばらくはもふもふが手放せない体になってしまったようだ。

まあ新しいジョブが来るたびに酷い目にあわされるのは婆さん：もとい作者のせいである。